

教育実践報告

教育学部教職センターにおける 特別支援学校教育実習の取り組み(3) —実習校の教育課程に対応した事前指導に関する 実習校・実習生による事後評価—

矢野口 仁・樋口 一宗・石黒 栄亀・山本 ゆう

Promoting the Teaching Practice of Special Schools for Children with Disabilities at the
Support Center for Teaching(3) :
Responding to School Curricula, Post-Assessment by the Questionnaire Survey at
Schools and by Student Teachers

YANOKUCHI Hitoshi, HIGUCHI Kazumune, ISHIGURO Eiki,
and YAMAMOTO Yu

要 旨

教育学部で3回目となる2022年度特別支援学校教育実習では、前年度の事後評価の結果を受け、教育実習に向けての事前指導の中で1)実習校の教育課程で大きな役割を担っている生活単元学習の理論と留意点を重点的に解説するとともに、授業の様子を撮影したビデオの視聴、2)生活単元学習の学習指導案の基本形を示し、仮の子供の実態を元に学習指導案を作成する演習、3)作成した学習指導案を元にした生活単元学習の模擬授業の3点を改善した。このことについて実習校と実習生にアンケート形式で事後評価を求めたところ、実習校と実習生の両方から一定の評価を得ることができた。

キーワード

特別支援学校 教育実習 教育課程 事前指導 事後調査

目 次

- I. はじめに
 - II. 2022年度特別支援学校教育実習の概要
 - III. 事後アンケート調査の結果
 - IV. 考察
 - V. まとめ
- 謝辞
注
文献
資料

I. はじめに

松本大学教育学部では、2017年度の学部開設時から特別支援学校教諭一種免許状取得のための特別支援学校教育実習(以下、特支教育実習)の準備を進め、2020年度に初回を行って以降、2022年度までに3回の特支教育実習を実施した。その準備・実施・事後評価の過程では、実習生の9割前後¹⁾を受け入れる長野県内の特別支援学校を中心に県内外の特別支援学校への説明と報告、並びに特別支援学校からの要望への対応に努め、双方のやり取りによって特支教育実習の体制を整えてきた。その経緯及び内容については矢野口・小島・小林・内藤(2021)¹⁾、矢野口・小林・樋口・石黒(2022)²⁾で報告した。

過去2回の特支教育実習では、実習生の配置、実習校と実習生との事前打ち合わせの流れ、実習に取り組む実習生の意識の醸成等に関わる大学の事前指導について、実習校から一定の評価を得た。その一方で、教育実習に関わる実習校の負担が大きくなるように配慮しつつ、実習生が自ら授業を構築する力、またそれを学習指導案に表現する力をいかに高めるかが課題として残された。

このことについての他大学での取り組みはこれまでも複数報告されており、大井・野村・姉崎(2019)³⁾は、特別支援学校における学習指導案づくりの要点を押さえたチェックリストを活用することが有用な方向性であることを示した。また、和(2019)⁴⁾は、大学の特別支援教育実習事前指導における学習指導案作成の指導の取組に関する2つの実践研究を報告し、辻(2020)⁵⁾は、大学の「特別支援教育実習の事前・事後指導」で多くの学生が不安を抱く「学習指導案」の作成に関わって、特別支援学校(知的)における「学習指導案」の持つ意味や、「学習指導案」作成のポイントを自らの経験知をまとめて紹介した。

これらの報告に学びつつ、教育現場からの要望に対して2022年度特支教育実習に向けての事前指導では、以下の3点を改善した。

(1) 知的障害教育並びに長野県の知的特別支援学校の教育課程で大きな役割を担っている生活単元学習の理論と留意点を重点的に解説するとともに、授業の様子を撮影したビデオを視聴することで特別支援学校の生活単元学習の授業をイメージできるようにした。(対応点1)

(2) 特支教育実習で作成することになる生活単元学習の学習指導案の基本形を示すとともに、子供の仮の実態を示して、それを元に学生が各自で学習指導案を作成する演習をした。(対応点2)

(3) 学生が作成し、教員が添削した学習指導案の中からグループ毎に一つを選び、グループでチームを組んで生活単元学習の模擬授業を行った。(対応点3)

本稿では、これら2022年度特支教育実習に向けての事前指導で行った対応を含めその概要を記すとともに、その取り組みに関する実習校と実習生からの事後評価について記す。そして、矢野口・小林・樋口・石黒(2022)²⁾での調査に引き続き、特支教育実習の実情についての調査の結果について記す。

研究の推進にあたっては、「事前指導・事後指導」の計画立案と全体進行を樋口が、学習指導案指導・模擬授業・実習の目標・事後報告への添削・講評を樋口・石黒・山本・矢野口が、実習生の配置・事前打ち合わせに向けての事前指導・実習校との諸連絡等を矢野口が担当した。

II. 2022年度特別支援学校教育実習の概要

1. 人数、配置方法、時期、参観訪問回数

2022年度特支教育実習における実習生は29名、実習校は11校。そのうち28名が長野県内の知的・肢体不自由・病弱特別支援学校10校で、1名が県外の総合特別支援学校1校で実習を行った。

実習生の配置は、過去2回の特支教育実習と同様、長野県内においては長野県特別支援学校校長会(以下、県特長会)を通じて各特別支援学校の実習生受入れ可能数を調査し、その上で教育学部教職センター(以下、センター)が行った。県外についてはセンターが直接特別支援学校と連絡を取り、教育実習の受け入れを依頼した。

実習時期は6月から11月で、月別の分布は表1のとおりである。

新型コロナウイルス感染症拡大第7波・第8波による実習生又は実習校の事情により実習時期の変更や実習期間の短縮等が数例あったものの、いずれも実習校とセンターが直接連絡を取り合って調整することにより

予定していた全員が現場での実習を終えることができた。

実習期間中の大学教職員の参観訪問については、新型コロナウイルス感染拡大により2校で訪問を控え電話で

の挨拶と様子伺いとしたが、その他9校には8名が延べ17回訪問した。

2. 2022年度特支教育実習の「事前指導・事後指導」の経過・内容

2022年度特支教育実習における「事前指導・事後指導」の授業の経過・内容は表2のとおりである。

1) 事前指導

2022年度実習生は2019年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大のため、学部のカリキュラムに位置づけられた「障害児臨床支援演習Ⅰ」^{注2}での知的特別支援学校の参観が叶わなかった。そのため第2回の授業では、知的障害並びに長野県の知的特別支

表1 2022年度特支教育実習の実施時期

月	人数(人)	割合(%)
6月	8	27.6
9月	13	44.9
10月	3	10.3
11月	5	17.2
計	29	100.0

表2 「2022年度特支教育実習事前指導・事後指導」の経過・内容

回	内 容	授業方法
1	・オリエンテーション① ・「事前指導」受講について ・今後のスケジュール ・長野県特別支援学校の教育理念等	対面
2	・知的特別支援学校の生活単元学習の授業動画視聴(対応点1) ・生活単元学習の考え方と指導案作成について(対応点2)	対面
3	・オリエンテーション② ・学習指導案作成の課題と模擬授業の進め方について(対応点2) ・グループ分け ・実習期間の確認 ・特支教育実習に向けての心構えについて	対面
4	・生活単元学習指導案指導①(対応点2)	対面
5	・生活単元学習指導案指導②(対応点2)	対面
6	・生活単元学習指導案指導③(対応点2)	対面
7	・模擬授業①(6月実習生)(対応点3)	対面
8	・実習の目標発表①(6月実習生)	対面
9	・実習報告①(6月実習生)	対面
10	・模擬授業②(9月実習生)(対応点3)	対面
11	・実習の目標発表②(9月実習生) ・模擬授業③(10月・11月実習生)(対応点3)	対面
12	・実習の目標発表③(10月・11月実習生)	対面
13	・実習報告②(9月前半実習生)	対面
14	・実習報告③(9月後半実習生)	対面
15	・実習報告④(10月・11月実習生)	対面
16	・実習のまとめ ・実習報告の総括(「特別支援学校教員に必要な資質・能力とは何か」)	対面

援学校の教育課程で大きな役割を担っている生活単元学習の理論と留意点を重点的に解説するとともに、知的特別支援学校の協力の下に、授業の様子を撮影したビデオを視聴することで特別支援学校の生活単元学習の授業をイメージできるようにした。(対応点1)

また、教育実習中に作成する学習指導案の形式については、学部が実習校の指導方針を尊重する一方で、実習校からは学部側から予め形式を示すことへの要望があった^{注3}。そのため第3回の授業では、実習校に過度の負担をかけないように留意しつつ、実習生が学習指導案を作成する際の拠り所となるよう、生活単元学習の基本形を示して指導した^{注4}。その際、教育実習の重点の一つである「児童生徒の実態に即した指導」の練習となるよう、児童生徒の仮の実態を示し、それに沿って学習指導案を作成する演習を行った。(対応点2)

さらに、前年度実習生を対象に行ったアンケート調査では、「実習の前にもっと勉強しておけばよかったこと」、「実習の前に身に付けておけばよかったと感じたこと」として、「学習指導案の書き方」や「給食指導や食事介助の仕方」と並んで「障害の理解(行動の特徴と対応の仕方)」と「特別支援学校の授業の進め方」が多かった^{注5}。そのため新型コロナウイルス感染症拡大第6波がやや落ち着いて対面での授業が可能になった状況を生かして、先の学習指導案を用いて学生のグループによる模擬授業を行い、教材作りや授業の進行を体験させた。(対応点3)

2) 事後指導

事後指導では「実習報告」を実習時期に合わせて4回に分けて行うとともに、授業の最終回に「実習のまとめ」を行った。

①「実習報告」

「実習報告」では、同一校同一期間に実習を行った実習生でグループを組み、Power Pointを使用して実習校の概要、実習の概要、学んだことと今後の課題を発表した。報告会には実習を終えた実習生と実習を控えた実習生の全員が参加した。

「実習報告」を実習時期に合わせて4回に分けて行ったのは、一つには実習生の記憶が薄れないうちにまとめと発表を行わせる方が実習の詳細や感想がより鮮明に伝わると考えたからである。もう一つの理由は、同年度の先に行われた実習の様子を知るこ

とで、後発の実習生が見通しと工夫をもって実習に取り組めると考えたからである。

②「実習のまとめ」

「実習のまとめ」では、実習生を5つのグループに分け、「特別支援学校教員に必要な資質・能力とは」のテーマでブレインストーミングと親和図法による整理を行い、その後整理されたものをグループ間で見合って質疑応答した。

ブレインストーミングでは、特別支援学校で見た教員の姿や実習での体験を基に、特別支援学校教員として必要な資質・能力を考えて付箋1枚につき一つずつ書き、それをグループ内で順に説明しては模造紙に貼ることを繰り返していった。1巡目は自身が最も大切だと思うことを記した付箋を貼り、同時にその理由について体験を交えて説明した。聞く側は質問や批判をせず、全て肯定的に受け止め拍手することをルールとした。

親和図法では、似ていることが書かれた付箋を近くにまとめ、まとまったものを線で囲ってタイトルをつけた。(これが「必要な資質・能力」になる。)(図1)

各グループでまとめたものを相互に見合い、見た先で相手グループのメンバーと質問応答することで「必要な資質・能力」に関する考え方を深めることができた。



図1. 「特別支援学校教員に必要な資質・能力とは」(実習生のまとめ(例))

Ⅲ. 事後アンケート調査の結果

1. 実習校を対象にした事後アンケート調査の結果

1) 時期

・2022年12月

2) 対象

・2022年度特別支援学校教育実習の実習校11校

3) 方法

長野県内の特別支援学校については、県特長会の実習担当者を通じて用紙を配布し、センターに直接返送してもらった。県外の特別支援学校にはセンターから用紙を郵送し、返送してもらった。

調査では実習生の配置や教育実習の事前指導、実習中の学部への対応、実習校から出された要望や学部の考えを反映させた変更点について、(ア)よい、(イ)概ねよい、(ウ)やや改善を要する、(エ)大いに改善を要するの4段階で回答を求め、可能な範囲で理由や詳細を記入してもらうようにした。

4) 結果

実習校を対象にした事後アンケートの結果は表3のとおりである。回収率は100%であった。

①教育実習生の受け入れと実習期間の決定までの手順について

「よい」「概ねよい」が9割を超えた。「やや改善を要する」の回答も1校(9.1%)からあった。

自由記述では、手順の丁寧さとわかりやすさについて評価する意見が多かった。学生が学校を訪問し

て自身の言葉で教育実習の受け入れを依頼するという手続きに関しては、「新型コロナ感染症拡大防止のために実習生の来校を控えてもらって電話と書類送付のみで対応したが、今後は感染対策に配慮しながら学生の来校を実現させたい」という意見があった一方、「やや改善を要する」に関わって「他大学と同様に電話の依頼のみにして、前年度の手続きは簡略化する方向でお願いしたい」との意見もあった。

②教育実習前の打ち合わせに関して

「よい」「概ねよい」が10割であった。

自由記述では、事前打ち合わせの日程の組み方について概ね評価された一方、一部でその仕組みが周知されていないとの指摘があり、センターとして反省点が残った。学校を訪問した学生の挨拶、姿勢、受け答え、実習に向けての意欲等について概ね評価いただいた。

③実習期間中の大学の対応について

「よい」「概ねよい」が10割であった。

自由記述では、新型コロナ感染症拡大による実習期間の変更等について、センターが窓口となって実習校と相談し変更調整を行った点が評価された。大学教職員の参観訪問についても評価され、今年度は新型コロナ感染症拡大のためそれができなかった学校からも「来年度はぜひ訪問いただきたい」との意見があった。

④大学の实習に向けての事前指導について

「よい」「概ねよい」が10割であった。

自由記述では、「真摯に取り組む実習生の皆さんの姿勢に、私たちも初心に戻ることができました」と、

表3 2022年度特支教育実習に関する事後アンケート(実習校)結果

項目	回答			
	「よい」校数 (%)	「概ねよい」校数 (%)	「やや改善を 要する」校数(%)	「大いに改善を 要する」校数(%)
①教育実習生の受け入れと実習期間の決定までの手順について	8 (72.7)	2 (18.2)	1 (9.1)	0 (0.0)
②教育実習前の打ち合わせに関して	10 (90.9)	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
③実習期間中の大学の対応について	10 (90.9)	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
④大学の实習に向けての事前指導について	10 (90.9)	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)

実習中の実習生の姿から学部における事前指導を評価する意見が多かった。教育実習中の指導・評価について現場の負担を軽減しようとする学部の取り組み内容についても、「大変ありがたい」と評価いただいた。

その一方で、実習生が記入提出する実習記録簿の書き方が実習生によって大きな差があったことを指摘する意見があり、事前指導の反省点が残った。また、実習生が4年生の7月に教員採用試験を受けることを考えると、適切な進路選択のために特支教育実習を3年生で行ったらどうかとの意見もあった。

2. 実習生を対象にした事後アンケート調査の結果

1) 時期

・2022年12月

2) 対象

・2022年度特別支援学校教育実習の実習生(4年生)29名

3) 方法

アンケート作成ソフト Microsoft Forms により質問を示し、回答を求めた。

調査では実習生の配置の仕組みや、今回重点的に行った生活単元学習に関する事前指導、また、実習校での学習指導案の添削に関する評価を求めた。

さらに、教育実習の実情を知るために、前年度と同様に実習中の出勤時間や退勤時間、授業実習等の回数について回答を求め、前年度との比較を行った。

4) 結果

回答数は27、回収率は93.1%であった。

① 学生の希望をもとに大学が実習校を指定する仕組みについて

学生の希望をもとに大学(センター)が実習校を開拓し指定する仕組みについて、実習生に評価を求めた結果は表4のとおりである。

表4 実習校の配置について

項目	回答数(人)	割合(%)
よい	22	81.5
よくない	1	3.7
どちらでもない	4	14.8

「よい」が8割強、「よくない」と「どちらでもない」の計が2割弱であった。

「よい」の理由としては、「自分の希望に沿って実習校を決めてくれたから」、「家(アパート)から近い学校で実習ができたから」、「自分ではどこの特別支援学校がよいか分からなかったから」、「通勤時間等が学生間でできるだけ平等になるよう決めてくれたから」等が挙げられた。

「よくない」の回答の理由は「家が遠い学校に配属された人がいたため」であった。「どちらでもない」の回答をした4人についても同様な理由であった。

② 生活単元学習を中心とした事前指導について

今回の教育実習に向けて生活単元学習を中心として行った事前指導についての評価は表5のとおりである。

「実習にとっても役に立った」「実習に役に立った」の計が85%を占めた。

③ 実習校での学習指導案の添削について

実習指導に関わる実習校の負担軽減を目的として、実習校での学習指導案への指導は、研究授業に関するものを除き添削でなく原則口頭で行うように改めて学部から依頼した。このことについての評価は表6のとおりである。

「よい」の回答が6割で、「その他」が3割強、「物足りなかった」が1割弱だった。

「よい」の理由としては、16名中4名が「指導いただく先生もお忙しい中、(研究授業の)学習指導案を1回丁寧に添削いただくだけでも気持ち的には十分

表5 生活単元学習を中心とした事前指導について

項目	回答数(人)	割合(%)
実習にとっても役に立った	12	44.4
実習に役に立った	11	40.7
あまり関係なかった	4	14.8

表6 実習校での学習指導案の添削について

項目	回答数(人)	割合(%)
よい	16	59.3
物足りなかった	2	7.4
よくない	0	0.0
その他	9	33.3

だった」を挙げ、別の4名も「学習指導案の添削の代わりに口頭での打ち合わせや指導をいただけたから」を挙げた。「指導教員が行ったのと同じ流れ(指導案)で授業を行ったから」を理由に挙げた実習生も3名いた。学習指導案の添削の機会は少なかったが、その分を補う口頭での指導をいただけたことが窺える。

「その他」の理由としては、9名中4名が「(研究授業以外では)学習指導案を作成しなかったから」であった。また、「学習指導案を添削してもらえれば勉強になると思いつつ、それが先生の通常業務に支障がでるくらいなら優先されなくてよい」、「先生から指導案作成より子どもと接して学んでほしいという願いを伺って納得したため」が各1名だった。2名は全ての指導案について添削を受けていた。

「物足りない」の理由としては、2名とも授業に向けての事前指導の充実を願うものであった。

④実習期間中の出勤時間について

ここからは特支教育実習の実情を知るための設問への回答である。

実習期間中の出勤時間については表7のとおりである。

「7時30分～8時」が59.3%で最も多かった。これを前年度(47.3%)と比較すると、12.0ポイント増であった。逆にこの時間帯の前後では、「7時～7時30分」が24.2ポイントの減、「8時～8時30分」が8.5ポイント増であった。

⑤実習期間中の退勤時間について

実習期間中の退勤時間については表8のとおりである。

「17時～17時30分」が最も多く40.7%だった。これに「17時30分～18時」と「18時～18時30分」を加えると92.5%となり、9割を超える実習生が18時30分までには退勤したことがわかる。これを前年度(89.5%)

表7 実習期間中の出勤時間

項目	回答数(人)	割合(%)
～7時	1	3.7
7時～7時30分	2	7.4
7時30分～8時	16	59.3
8時～8時30分	8	29.6
計	27	100.0

と比較すると、3.0ポイントの微増だった。

⑥教育実習中の「参観」、「STとしての授業実習」、

「CT(MT^{註6})としての授業実習」の回数について
実習生の実習の「参観」、「STとしての授業実習」、
「CT(MT)としての授業実習」の各回数(朝の会・帰りの会を含む)については表9のとおりである。

「参観」については、「0～5回」と「6～10回」の合計が51.8%だった。これを前年度(5.3%)と比較すると、46.5ポイントの大幅増であった。逆に「11～15回」と「16～20回」の計は18.5%で、前年度(47.3%)と比較すると28.8ポイントの大幅減であった。「参観」の回数が大幅に減ったことがわかる。

表8 実習期間中の退勤時間

項目	回答数(人)	割合(%)
～17時	0	0.0
17時～17時30分	11	40.7
17時30分～18時	7	25.9
18時～18時30分	7	25.9
18時30分～19時	1	3.7
19時～19時30分	1	3.7
19時30分～	0	0.0
計	27	100.0

表9 実習中の「参観」、「STとしての授業実習」、
「CT(MT)としての授業実習」の回数

回数	回答数(人) 割合(%)		
	参観	STとして 授業実習	CT(MT) として 授業実習
0～5回	7(25.9)	4(14.8)	7(25.9)
6～10回	7(25.9)	4(14.8)	11(40.7)
11～15回	3(11.1)	5(18.5)	6(22.2)
16～20回	2(7.4)	3(11.1)	2(7.4)
21～25回	2(7.4)	2(7.4)	0(0.0)
26～30回	3(11.1)	2(7.4)	1(3.7)
31回～	3(11.1)	7(25.9)	0(0.0)
計	27(100.0)	27(100.0)	27(100.0)

「STとしての授業実習」については、「31回～」が25.9%で最も多く、「21～25回」、「26～30回」との計は40.7%だった。前年度が「11～15回」と「16～20回」の計が57.9%であったことと比較すると、「STとしての授業実習」が数多く行われたことがわかる。

「CT(MT)としての授業実習」については、「6～10回」が40.7%で最も多く、その前後の「0～5回」と「11～15回」との計は88.8%だった。前年度(84.2%)と比較すると4.6ポイントの微増だったが、ほぼ同じ傾向であった。

⑦教育実習で自分が成長したと思う点

ここからは、実習生が教育実習を通じて感じたことについて質問した結果である。選択肢については、前年度の実習生の回答を参考にして設定した。

今回の教育実習で実習生自身が成長したと思う点は表10のとおりである。

表10 教育実習で自分が成長したと思う点

項目	回答数(人)	割合(%)
TTでの役割分担や連携、柔軟な対応への理解	15	55.6
特別支援学校の先生の仕事の様子を知れた	13	48.1
障害の理解(行動の特徴と対応の仕方)	12	44.4
発語のない児童生徒とのコミュニケーションの仕方	8	29.6
積極的に児童生徒に関われるようになった	6	22.2
生活単元学習や日常生活指導の理解	6	22.2
児童生徒の成長を願う心	5	18.5
待つことができるようになった	4	14.8
授業中の視野の広がり	4	14.8
児童生徒の視点でものを捉えられるようになった	4	14.8
精神的な落ち着き	2	7.4
朝の会・帰りの会のやり方を身に付けられた	2	7.4
学習指導案の書き方	1	0.0
その他	0	3.7

「TTの役割分担や連携、柔軟な対応」が最も多く5割を超え、それに続いて「特別支援学校の先生の仕事の様子」と「障害の理解(行動の特徴と対応について)」が4割を超える実習生が成長を感じていた。

⑧教育実習前に勉強しておいてよかったと感じたこと

教育実習の前に勉強しておいてよかったと実習生自身が感じたことは表11のとおりである。

「障害の理解(行動の特徴と対応について)」が最も多く7割を超えた。それに続いて「他の人の報告」が4割近くあり、「学習指導案の書き方」も3割を超えた。

⑨教育実習前に勉強しておけばよかったと感じたこと

教育実習前に勉強しておけばよかったと実習生自身が感じたことは表12のとおりである。

表11 教育実習の前に勉強しておいてよかったと感じたこと

項目	回答数(人)	割合(%)
障害の理解(行動の特徴と対応の仕方)	19	70.4
他の人の実習報告	10	37.0
学習指導案の書き方	9	33.3
特別支援学校の特徴	6	22.2
支援が上手くいなくても次を考える心	6	22.2
障害児への教育に関するビデオを視たこと	6	22.2
挨拶の仕方	3	11.1
特別支援学校の教育課程	2	7.4
ポジティブな心	2	7.4
食事介助の仕方や車いすの扱い方	1	3.7
授業の準備の仕方	1	3.7
その他	1	3.7
新型コロナに関する対応(感染予防策)	0	0.0
メモの取り方	0	0.0

「TTの役割分担や動き方の実際」が最も多く4割を超え、それに続いて「教材・教具に関する知識」と「障害の理解(行動の特徴と対応について)」が3割前後だった。「給食指導や食事介助の仕方」を挙げた実習生も25.9%いた。

IV. 考察

1) 実習生の配置並びに実習開始までの手順について

センターが窓口となり学校とやり取りしながら実習生を配置していくことや、センターと実習校の共通理解の下で実習期間や事前打ち合わせ日を設定していくことについて、実習校から「よい」「概ねよい」の評価が9割を超えた。また、実習生からも「よい」の評価が8割を超えた。この結果は2021年度特支教育実習に関わる事後アンケート調査の結果^{注7}とほぼ同じであり、実習生の配置並びに実習期間までの手順については適切であったといえる。

しかし実習校から、教育実習の受け入れを依頼するために学生本人が学校を訪問することについて再考を求める意見もあったため、今後の検討が必要である。また、実習生から配置結果への不満・疑問が出されたことについては、配置理由を丁寧に説明していく必要があると考える。

表12 教育実習前に勉強しておけばよかったと感じたこと

項目	回答数(人)	割合(%)
TTの役割分担や動き方の実際	12	44.4
教材・教具に関する知識	9	33.3
障害の理解(行動の特徴と対応の仕方)	8	29.6
給食指導や食事介助の仕方	7	25.9
特別支援学校の授業の進め方	6	22.2
学習指導案の書き方	5	18.5
支援事業所等についての知識	3	11.1
基本的な手話	3	11.1
特別支援学校の特徴	3	7.4
その他	2	11.1

2) (対応1) 事前指導において生活単元学習を中心とした説明を行うとともに、授業の様子をビデオで視聴したことについて

実習生からの回答では、「実習にとっても役に立った」と「実習に役に立った」の計が9割を超えるとともに、「教育実習の前に勉強しておいてよかったと感じたこと」への回答の中でも「障害児への教育に関するビデオを視たこと」が上から4番目(22.2%)に挙げられていることから、知的特別支援学校の教育課程において大きな役割を担っている生活単元学習を中心に事前指導を行ったことは有効であったと考えられる。

3) (対応2) 生活単元学習の学習指導案の基本形を示し、子供の仮の実態を元に学生が各自学習指導案を作成する演習をしたことについて

上記と同様に9割を超える実習生から「役に立った」との評価があったのと、「教育実習の前に勉強しておいてよかったと感じたこと」への回答の中でも「学習指導案の書き方」が上から3番目(33.3%)に挙げられたことから、生活単元学習の学習指導案の作成演習を含めた事前指導は有効であったと考えられる。

ただし、「学習指導案の書き方」については、「教育実習前に勉強しておけばよかったと感じたこと」にも挙げられている(上から6番目)ため、さらなる指導の必要があると考えるべきである。

4) (対応3) 学生が作成した学習指導案を元に生活単元学習の模擬授業を行ったことについて

上記と同様に9割を超える実習生から「役に立った」との評価があったのと、「教育実習で自分が成長できたと思う点」に関して「生活単元学習や日常生活指導」を挙げた実習生も少なくなかった(22.2%)。しかし、「教育実習前に勉強しておけばよかったと感じたこと」に関して「TTの役割分担や動き方の実際」を挙げた実習生が最も多かった(44.4%)ので、今後は生活単元学習関係の模擬授業の中で、TTの役割やその役割の果たし方について指導していく必要があることがわかった。また、「教材・教具に関する知識」を挙げた実習生も多かった(33.3%)ため、どのような教材が開発され活用されているかに関する学習と適切な教材を作成する演習の必要が示唆された。

5) 実習校での学習指導案の添削について

実習校での学習指導案への指導に関して、研究授

業の学習指導案を除き、添削ではなく原則口頭で行うように学部から依頼したことについて、実習校からは「現場の負担を軽減しようとする学部の取り組みが大変ありがたい」との評価があった。実習生からも「口頭で丁寧な指導をしてもらえた」ので「よい」とする評価が6割近くあったため、学習指導案への指導に関する方向性は一定の評価を得たといえる。

V. まとめ

2020年度から始まった本学部の特支教育実習も2022年度までに3回を終え、その都度センターから実習校と実習生に事後アンケートへの協力をお願いするとともに、そこで出された意見・要望への対応を積み重ねてきた。それにより今では問題点を率直に指摘してもらえるようになり、このことがまた特支教育実習をより良くしていくための契機となりアイデアにもなっている。

2023年度の特支教育実習に向けては、今回のような生活単元学習を中心とした事前指導に合わせて、TTによる授業の進め方の基本に関する学習やその演習を含めた事前指導の必要が明らかになった。また、授業の設計図である学習指導案の書き方に関しても、現場での口頭での指導を速やかに記録したり、指導案に反映できたりする力をつけておく必要があることがわかった。

教育実習の受け入れ依頼に関しては、2023年度の関係分は既に済んでいるので、2024年度の関係分を行うにあたっては、現場の意向を汲んで現場の負担が少しでも減るように対応していく必要がある。

本学のように附属学校園を持たない大学においては、教育実習は市町村立(場合によっては私立)並びに都道府県立の学校をお願いして実施するものであるため、必要なことであっても学校の了解なく指導内容を増やすことはできない。また、実習指導にあたる先生方も指導に熱意を持って取り組もうとしても日々の業務をこなす責任から免れるわけにはいかない。そのため、現場の限られた時間の中で実習指導を充実させるためには、教育実習に入る前に学生の意識、意欲、基礎的・基本的な力を十分高めておく必要がある。

また、全国各地で深刻な教員不足に陥っている中、一人でも多くの学生が教職を選択することが期待さ

れると同時に、教職に就いた後も自ら資質能力を磨き、専門性を向上させようとする教員の育成が求められている。このような状況の中で教員養成課程を有する大学・学部が果たす役割は大きく、そのためにも実習校と実習生の双方に魅力的で充実した教育実習(事前指導・事後指導を含む)を作り上げていく必要がある。今後も大学(センター)として小さな対応・改善を積み重ねていきたい。

謝辞

松本大学教育学部の特支教育実習(事前指導・事後指導を含む)の実施にあたっては、長野県教育委員会特別支援教育課、長野県特別支援学校校長会、長野県松本養護学校、長野県寿台養護学校、信州大学教育学部附属特別支援学校をはじめ長野県内外の特別支援学校の先生方のご協力をいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

注

- 注1 松本大学教育学部が実施した特別支援学校教育実習において、全実習生における長野県内の特別支援学校で教育実習を行った実習生の割合は、93.3%(2020年度)、84.2%(2021年度)で、2022年度は96.7%であった。
- 注2 松本大学教育学部の臨床支援演習のカリキュラムについては矢野口・小島・小林・内藤(2021)¹⁾, p74.
- 注3 長野県の特別支援学校に多くの実習生を送り出す本学部としては、学習指導案の形式については長野県教育委員会『特別支援教育 学習指導要領サポートブック』(2019)を参考に指導している。
- 注4 学生に生活単元学習指導案の基本形として示した項目と留意点は稿末資料1参照。
- 注5 矢野口・小林・樋口・石黒(2022)²⁾, pp.161-162.
- 注6 長野県の特別支援学校では、TTにおいて主に授業を進める教員のことをCT(Chief Teacher)と呼ぶ。MT(Main Teacher)と同じ。
- 注7 矢野口・小林・樋口・石黒(2022)²⁾, pp.154-161.

文献

- 1) 矢野口仁・小島哲也・小林敏枝・内藤千尋, 「教育学部教職支援センターにおける特別支援学校教育実習の取り組み—実習受入校へのアンケート調査による評価と対応—」『松本大学研究紀要』19, pp.73-82(2021).
- 2) 矢野口仁・小林敏枝・樋口一宗・石黒栄亀, 「教育学部教職支援センターにおける特別支援学校教育実習の取り組み(2)—実習校からの要望への対応と実習校・実習生へのアンケート調査による事後評価—」『松本大学研究紀要』20, pp.151-163(2022).
- 3) 大井雄平・野村和代・姉崎弘, 「特別支援教育の学習指導案づくりに関するツール開発: 特別支援学校教育実習生による試行的活用からの示唆」『常葉大学教育学部紀要』39, pp.259-265(2019).
- 4) 和史朗, 「特別支援教育実習事前指導における学習指導案作成の指導」『東北福祉大学教育・教職センター 特別支援教育研究年報』11, pp.69-78(2019).
- 5) 辻誠一, 「教師を目指す学生に伝えたい実践力⑦~特別支援学校(知的)における「学習指導案」一考~」『東北福祉大学教育・教職センター 特別支援教育研究年報』14, pp.65-80(2022).
- 6) 長野県教育委員会, 『特別支援教育 学習指導要領サポートブック』, (2019).
- 7) 文部科学省, 「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告」, (2022), (https://www.mext.go.jp/content/20220331-mxt_tokubetu01-000021707_1.pdf (閲覧日2023.1.5)).

資料

1)生活単元学習指導案の基本形

1. 単元名

・児童が親しみをもつことができる、楽しそうな名称を付ける。

2. 単元設定の理由

①どのような児童なのか、集団としてどのようにとらえられるかを述べる。

②どのような活動内容を設定し、何を願うのか。教材としての価値を述べる。

③その際、指導上、配慮することは何かについて述べる。

3. 単元の目標

・全体の目標を述べる。

①知識・理解に関する目標

②思考力・判断力・表現力に関する目標

③学びに向かう力・人間性に関する目標

4. 単元展開の概要

・全何時間扱いでどのような内容を展開するか端的に表などを用いて述べる。

5. 指導上の留意点

・単元全体を通して留意すべきことを箇条書きで述べる(単元設定の理由の③を具体化したものでよい)。

6. 単元における個々の目標

・個々について、単元目標を具体化して述べる。

①知識・理解に関する目標

②思考力・判断力・表現力に関する目標

③学びに向かう力・人間性に関する目標

7. 本事業

(1)主眼

※集団全体の本時のねらいを述べる。

(2)個々の本時のねらい

※個々について、単元目標を具体化して述べる。

①知識・理解に関する目標

②思考力・判断力・表現力に関する目標

③学びに向かう力・人間性に関する目標

(3)本時の位置

・全○時中の第○時

(4)指導上の留意点

・上記「5. 指導上の留意点」の中から、特に本時に関係する留意点を具体的に記述する。

(5)展開

・導入、展開、まとめの3段階に分けて記述する。

・活動、教師の指導及び児童の反応、時間を示す。

・全体の動きと個々の動きを必要に応じて分割して記述する。

(6)授業会場図

・本時の授業会場とそこにおける児童、教師(CT、ST)、教材等の位置を示す。

8. 単元全体を通して活動場所が一定の場合、基本となる形を示す。

2)2022年度特別支援学校教育実習に関するアンケート(実習校向け)

問1, (教育実習生の受け入れと実習期間の決定までの手順について)実習校と実習期間の決定の手順について、「特校への受入可能数の調査(昨年5月)⇒受入可能数の決定(昨年6月)⇒大学による学生の配置(昨年7月)⇒学生が学校に伺っての実習受け入れ依頼(昨年7~9月)⇒学校から実習期間のご連絡(今年3~4月)」という流れで進めてまいりました。この手順についてどのように感じられたでしょうか。当てはまるものに○印をおつけください。

(ア)よい、(イ)概ねよい、(ウ)やや改善を要する、(エ)大いに改善を要する

問2, (教育実習の事前打ち合わせに関して)実習の事前打ち合わせの手順について、「実習開始2ヶ月前に実習生から実習校に期日の問い合わせ⇒実習開始1ヶ月~1週間程度前に実習生が実習校に伺い、大学からの書類を届けるとともに、実習に関する詳細なご説明を受ける」という流れで進めてまいりました。この手順や訪問時の学生の姿勢はいかがでしたでしょうか。当てはまるものに○印をおつけください。

(ア)よい、(イ)概ねよい、(ウ)やや改善を要する、(エ)大いに改善を要する

問3, (実習期間中の大学の対応について)大学では実習校からのご連絡に対応できるよう窓口を設けたり、実習校のお許しの下に大学から教員が伺って実習生の様子を参観・確認したりするようにいたしました。また、新型コロナの感染状況が厳しい時期は、勝手ながら電話でのご挨拶に代えさせていただきました。今年度のこのような大学の対応について当てはまるものに○印をおつけください。

(ア)よい、(イ)概ねよい、(ウ)やや改善を要する、(エ)大いに改善を要する

問4, (実習期間中の実習生の姿勢を通じて感じられ

た大学の実習に向けての事前指導について)教育実習に向けて、大学では実習に関する意識喚起、現場における言動の基本、指導案作成の基本の指導、障害のあるお子さんへの対応の基本等の指導を行ってまいりました。実習生に関する評価報告は既にいただいておりますが、実習生の姿を通じてお感じになられた大学の実習に向けての事前指導について当てはまるものに○印をおつけください。

(ア)よい、(イ)概ねよい、(ウ)やや改善を要する、(エ)大いに改善を要する

3)2022年度特別支援学校教育実習に関するアンケート(実習生向け)

問1, (実習校の配置について)教育実習先(実習校)は学生の希望をもとに大学が指定する仕組みで決定しました。この仕組みについてどう感じましたか。該当するものに○印をつけてください。

(ア)よい、(イ)よくない、(ウ)どちらでもない

問2, (大学の实習に向けての事前指導について)今回の教育実習に向けての事前指導では、特別支援学校の教育課程で大きな役割を担っている生活単元学習について重点的に説明したり、授業のビデオを見てもらったりした他、それに基づいて学習指導案を作成したり、模擬授業を行う等の演習をしてきました。実習を終えて今回のこのような指導内容についてどのように感じましたか。該当するものに印をつけてください。

(ア)実習にとっても役に立った、(イ)実習に役に立った、(ウ)あまり関係なかった

問3, (実習期間中の指導案の添削について)教育実習では、研究授業を除いて指導教員による授業実習の指導案の添削はありませんでした。このことについてどう感じましたか。該当するものに○印をつけてください。

(ア)よい、(イ)物足りなかった、(ウ)よくない、(エ)その他

問4, (実習期間中の出勤時間について)実習期間中の毎日の出勤時間はおおよそ何時頃でしたか。該当するものに○印をつけてください。研究授業の準備等で特別出勤が早くなった日を除き、「おおよそ」でお答えください。

(ア)~7時、(イ)7時~7時30分、(ウ)7時30分~8時、(エ)8時~8時30分

問5, (実習期間中の退勤時間について)実習期間中の毎日の退勤時間はおおよそ何時頃でしたか。該当するものに○印をつけてください。研究授業の準備等で特別帰りが遅くなった日を除き、「おおよそ」でお答えください。

(ア)~17時、(イ)17時~17時30分、(ウ)17時30分~18時、(エ)18時~18時30分、(オ)18時30分~19時、(カ)19時~19時30分、(キ)19時30分~

問6, (実習中の「参観」の回数)実習期間中に行った「参観」の回数は何回でしたか。時間に長短があると思いますが、朝の会・帰りの会を含めて回数で数え、該当するものに印をつけてください。

(ア)0~5回、(イ)6~10回、(ウ)11~15回、(エ)16~20回、(オ)21~25回、(カ)26~30回、(キ)31回~

問7, (実習中のSTとしての授業等の回数)実習期間中に行ったSTとしての授業等の回数は何回でしたか。時間に長短があると思いますが、朝の会・帰りの会を含めて回数で数え、該当するものに印をつけてください。

(ア)0~5回、(イ)6~10回、(ウ)11~15回、(エ)16~20回、(オ)21~25回、(カ)26~30回、(キ)31回~

問8, (実習中のCTとしての授業等の回数)実習期間中に行ったCTとしての授業等の回数は何回でしたか。時間に長短があると思いますが、朝の会・帰りの会を含めて回数で数え、該当するものに印をつけてください。

(ア)0~5回、(イ)6~10回、(ウ)11~15回、(エ)16~20回、(オ)21~25回、(カ)26~30回、(キ)31回~

問9, (成長したと思う点)今回の教育実習で自分が成長したと思う点はどのようなことですか。最もそのように思えるものから3つ以内で印をつけてください。

(ア)障害の理解(行動の特徴と対応について)

(イ)児童生徒の視点でものを捉えられる

(ウ)TTの役割分担や連家、柔軟な対応

(エ)特別支援学校の先生の仕事の様子

(オ)学習指導案の書き方

(カ)待つことができるようになった

(キ)発語のない児童生徒とのコミュニケーション

(ク)積極的に児童生徒に関われるようになった

(ケ)精神的な落ち着き

(コ)児童生徒の成長を願う心

(サ)生活単元学習や日常生活指導

(シ)朝の会・帰りの会の進め方の理解

(ス)授業中の市やの広がり

(セ)その他

問10, (教育実習前に勉強しておいてよかったこと)

今回の教育実習の前に勉強しておいてよかった、または身に付けておいてよかったと感じたことは何でしたか。最もそのように思えるものから3つ以内で印をつけてください。

(ア)障害の理解(行動の特徴と対応について)

(イ)学習指導案の書き方

(ウ)特別支援学校の特徴

(エ)特別支援学校の教育課程

(オ)ポジティブな心

(カ)支援が上手くいなくても次を考える

(キ)新型コロナに関する対応(感染予防)

(ク)食事介助の仕方や車いすの扱い方

(ケ)挨拶の仕方

(コ)メモの取り方

(サ)授業の準備の仕方

(シ)障害児への教育に関するビデオを視聴

(ス)他の人の実習報告

(セ)その他

問11, (教育実習前に勉強しておけばよかったこと)

今回の教育実習の前に勉強しておけばよかった、または身に付けておけばよかったと感じたことは何でしたか。最もそのように思えるものから3つ以内で印をつけてください。

(ア)障害の理解(行動の特徴と対応について)

(イ)特別支援学校の授業の進め方

(ウ)学習指導案の書き方

(エ)給食指導や食事介助の仕方

(オ)教材・教具に関する知識

(カ)特別支援学校の特徴

(キ)支援事業所等についての知識

(ク)TTの役割分担や動き方の実際

(ケ)基本的な手話

(コ)その他